



都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル T113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

103

30.MARCH
2010

特集 イタリアの小さなまちの豊かな生活

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集:「イタリアの小さな町の豊かな生活」	
特集にあたって	1
特集 1. メルカッソロは人口1500人の山奥の町、元気で陽気な752歳。	2
特集 2. 町の豊かさとは何か—JUDI関西が見たイタリアの豊かさ	6
特集 3. イタリアのアグリトウリズモ	9
特集 4. イタリアの元気の源は、チェントロミノーレ(小さな町)にある。	14
●JUDI20周年記念事業特別委員会報告	22
●選挙管理委員会公告	23
●事務局より	24

特集:イタリアの小さな町の豊かな生活

特集にあたって

東京一極集中、大都市偏重に対して一方に限界集落という日本の現状に対し、コンパクトシティ、都市のストック、スローライフ、スローフード、地産地消のコミュニティ経済、参加のまちづくり、これらが単なるスローガンではなく、60年代から課題に掲げてやってきたのがヨーロッパ、なかでもイタリアの都市であることは皆さんご承知の通り。

12年前に我々はメルカッソロでそのこ

とを体験し、色々なことを考えた。ここに見られる豊かな生活は決して凡々たる生活から得られたものではないし、それなりの課題もある。生活の確かな価値観とそれを自分のものにするしぶとい試行錯誤、根強い実行力、培われた審美眼、そのようなものが今の豊かな生活をもたらしている、そのことを再度確かめるのが、今回のセミナーである。(井口 勝文)

JUDI関西海外交流セミナー2009 イタリア部会

1997年に第1回の海外交流セミナーで訪問した井口勝文氏のメルカッソロのお宅を、2009年JUDI関西海外交流セミナーのイタリア部会として再訪した。90%修復が完了した井口邸を中心とするセミナーの企画は、8月25日から29日の5日間をコアとして20名が参加し、それぞれの興味によりイタリア各地を探訪し、メルカッソロのセミナーに集結した。(訪問都市8P参照)

前半は2つのコースに分かれ、Aコースはトスカーナ州を中心に、フィレンツエからヴィンチ、モンテカティーニ・テルメ、サン・ミニアートを経てボローニャを歴訪。Bコースはイタリア半島の南東部、バーリからカステル・デル・モンテ、アルベロベッソ、チステルニーノ、マテーラといった特徴ある住居を持つ都市を訪れた後、アドリア海沿いに列車で北上し、ペーザロでAコースと合流した。

A、B合流後のコアセミナーは、ウルビーノでラファエッロ生家などを観てメル

カッソロに入り、井口邸を中心に4つの性格の異なるホテルに分宿し、26日27日はメルカッソロの都市計画に関する方々からレクチャーを受け、周辺の集落を視察し、27日の夜は町の住民の方々や井口さんの友人が加わった賑やかなパーティーが開かれた。

28日はミケランジェロの生誕地カプレージェ・ミケランジェロ、聖フランチエスコの修道地ラ・ヴェルナを経てポッピに宿泊し、ワイン祭(Festa del Vino)に参加、そして明くる29日にフィレンツエで解散という、なんとも内容の濃いセミナーであった。今回のセミナーで訪れた都市の数は、22余りとなる。

解散後、私と千葉さんはジェノヴァ湾に面する世界遺産、チンクエテッレの漁村を廻り、サンタ・マルゲリータ・リグレから船でポルトフィーノに入り、そして大西洋時代に全盛を誇ったジェノヴァを経てミラノから帰路についた。(難波 健)

メルカテッロは人口 1500 人の山奥の町、 元気で陽気な 752 歳。

井口 勝文

MASAHUMI INOKUCHI
京都造形芸術大学

■なぜ再びメルカテッロに行くのか？

中部イタリアの山奥に隠れた桃源郷があることを、JUDI 関西は知っていた。桃源郷の町の名はメルカテッロ スル メタウロ Mercatello sul Metauro (メタウロ川沿いのメルカテッロの意。同名の他の町と区別している)、マルケ州の西の端にある人口 1500 人の町である。12 年前、1997 年に JUDI 関西の一一行 28 人がそこを訪れて、その有様を JUDI ニュース 44 号に報告しているから、ご記憶の方もあるだろう。

ローマへフィレンツェへミラノを結ぶイタリアの国土幹線をアレッツォ Arezzo から外れて、山越えのバスに揺られて 2 時間。そのバスも一日に 2 本（学校が休みの期間は一日に 1 本）しか走らないという僻地の町だ。わが国であれば間違いなく「限界集落」のタイトルを頂戴するはずの山奥の小さな町が、どっこい元気で、陽気で、リッチで、みんなが幸せそうに暮らしている。

「これは見に行かなくちゃあならない」と、思い立って行ってみたのが 12 年前のことだった。

その後コンパクトシティとか、コミュニティ経済とかが取り沙汰されて話題にはなってきたけれど、掛け声と局地戦での単発的な勝利だけでは焼け石に水。わが国のおおかたの農村や都市の生活はますます惨めになる一方で、まさに限界だ。地方では過疎化、高齢化が進む一方で多くの都市の中心市街地は空洞化、郊外ではロードサイドショップが大繁盛して日本の社会はほぼ完全にファースト風土化（三浦展）してしまった。

この勢いは無論日本だけにとどまらない。2005 年の海外セミナーで訪れたブータンを除いて、アジア中にアメリカ発のグローバル化旋風が吹き荒れて、成す術もなく彷徨うしかない。

さすがに西ヨーロッパの国々では、「グローバル化」（実は「アメリカナイズ」の換え言葉）に惑わされることなく、何とかローカル路線に踏みとどまっている。いや、踏みとどまろうと頑張っている。その結果、日本の現状と比べると、「イタリアではこんな小さな町でもずっと立派に自分で生きている」という風に見える。「やれば出来るんだ」、そんな勇気をもらうために、もう一度メルカテッロを訪れて気力を取り戻そう。

JUDI 関西の一一行 20 人は、そんな思いで、再度メルカテッロに行くことに決めた。

■町の起源は 13 世紀の計画都市

この地方一帯に砦を構えて割拠していた豪族が、ローマ教皇庁からの呼びかけもあって、一箇所に集まって市壁を構え、自治都市コムーネを結成したのが 1257 年という記録が残っている。

町の人たちはこの年をもってメルカテッロの町の起源としている。

メタウロ川とその支流であるサン・アントニオ川の合流する平坦地に町は建設されている。このあたりは当時すでに教区教会や修道院が建てられ、交易の場所にもなってこの地域の中心的な場所になっていた。そこで、この場所に、自分たちの都市を建設することに決めたのである。交易の場所（メルカート mercato）であったことに、町の名前は由来している。

豪族たちは砦を出て都市に移住して館を建設する。町の庁舎もこのときに建設された（1880 年に大規模に改築）。中央広場や道路がグリッド状に整えられているのは、メルカテッロが自然発生的というよりもこのように平坦地に計画的に建設された都市であることによる。

■近代以降の町の膨張と人口減少

1860 年以降のイタリア統一では全国の都市コムーネがそのまま、基礎自治体としてのコムーネを形成する。メルカテッロもそのようなコムーネのひとつであり現在に至っている。

イタリアの基礎自治体、コムーネはいずれもこのような経緯を経ており、2008 年末時点でのコムーネの総数は 8101 である。1 コムーネ当たりの人口は平均 7400 人である。平成の大合併を完了したわが国のそれは 10 倍の 72000 人であるから、国や自治体のあり方に関する考えが大きく異なるであろうことがこの一事からも見て取れる。

第 2 次大戦終焉までのメルカテッロはこの地方の農業に支えられた中心都市であった。1950 年代に最大人口の約 3000 人に達するが、その 80% は町の外に住む農民であり、市壁に囲まれた町の中にはかつての豪族の末裔などの大地主のファミリー、そこに仕える様々な使用人、役人、手工業の職人や商人、農家に雇われる日雇労働者などが住んでいた。まだ中世以来の都市の面影を色濃く残していた様子が、当時の写真には写っている。

1950 年代にイタリア全土の工業化が進むに連れてメルカテッロの人口は減少する。

その過程はわが国の経緯と何ら変わることろがない。

多くの農民が農業を棄てて大都市へ移住する。あるいはメルカッソロで盛んになつたタバコ工場や繊維工場の仕事を求めて、町の中心市街地に移ってくる。

メルカッソロとその周辺の町で、起こつた最初の工業化は、戦前のタバコ産業であった。1950年代になるとそれが廃れて、替わってジーンズなどの品質の高い紡績業が盛んになってきた。この流れに乗つて関連の中小の企業が起き、商業活動も次第に盛んになってきた。

最近では電子部品の生産、金属加工、機械加工、木材加工、食品加工といった熟練工による地場の産業が定着している。

第1次産業では暖炉の薪や木炭用材の伐採、製炭が特筆すべき産業として定着している。周辺の山林の保全、修景もこれによつて保たれている。それらの人の手が入つた山で採れる豊富な茸やトリュフも、この地方の特産品として知られている。

このような経済状況はそれまでのメルカッソロの人口の減少傾向を食い止め、さらには中心市街地の存在感を高めている。

1950年代後半以降は大きな都市への人口移動が進んで、メルカッソロの人口は1951年の2841人をピークにして1961年までの10年間で30%減少した。その後漸減して1991年にはピーク時の53%、1499人にまで減少した。しかしその後は約1500人で安定している。

1950年代後半以降メルカッソロ全体の人口は減少したが、中心市街地の人口は増加した。その結果市壁の外に住宅や工場の建設が進み、市街地は大きく拡大した。町を迂回するバイパス道路がつくられたのもこの頃である。

市街地が拡大する一方で農業とその耕作地の状況も一変した。多くの農民が耕作放棄したこと、長い歴史を経てきた折半小作農業(メッザ ドゥリア)の社会構造が崩壊する。残った小作人は次第に大土地を所有し、あるいはより有利な条件で借地を増やすことで、機械化された大規模な農業経営者に変わって行った。一方で農業従事者は1991年までに1951年の8%(79人)にまで減少し、耕作放棄地が増えている。本来の耕作地の22%しか耕作されていない。その結果、灌木が茂り、葡萄の列が畑を仕切り、農業集落の親密な賑わいが見られた田園の生活風景が消滅して、メルカッソロを囲む山と田園の風景がこの半世紀で様変わ

りしている。

ここで比較のためにイタリア全土の人口増減の傾向を記しておく。イタリアの人口増加の傾向は、1980年代以降は増減なしで平行状態を保っていたが、今世紀に入ってからは移民によって年率0.6%程度増加している。

メルカッソロの人口も2001~2009の8年間で54人増加している。中国人移民がこの地域の繊維工場に職を得て流入したことが数字に表れたものと思われる。メルカッソロにおける外国人居住者は2001年時点では38人(ヨーロッパ系19人、アフリカ系9人、アジア系10人)、全人口の約2.5%であった。現時点の数値は入手していないが、噂ではメルカッソロの中国人居住者は30人とも60人とも言う。メルカッソロは冷静に状況を受け止めており、中国人移民も次第に町の生活に馴染んでいくように見える。

■豊かな生活を守る都市計画

1950年代以降の産業の工業化、都市への人口移動はわが国と全く同じ経緯を辿ったと言つてもいいだろう。それにもかかわらずメルカッソロは何ゆえにこれほど豊かで美しい生活風景を獲得しているのか。わが国は何ゆえにこれほど貧しく、みすぼらしい風景をつってしまったのか。その答えを求めて我々はメルカッソロにやって来たのだった。

メルカッソロは1994年に都市基本計画P.R.G.を策定している。これはマルケ州が策定した州の風景計画の中に位置づけたものであり、このプロセスは1985年の国のガラッソ法によってイタリアのほぼ全てのコムーネで促進された。

メルカッソロは1985年に都市建設計画P.di F.を策定していたが、それを見直してメルカッソロの山や田園を含む全域、全市民を対象にする風景計画、都市計画としたのが現行の都市基本計画P.R.G.である。

それ以前、1988年には歴史的中心市街地の保全の方針を定めた地区詳細計画、1989年には中心市街地の小売店舗の立地を守るべく定められた商業計画、1992年には山間の城砦集落であるカステッソ デッラ ピエヴェ Castello della Pieveを守る地区詳細計画が策定されている(2009年改定)。

都市基本計画によって市街地とその周辺地区のゾーニングは次の様に定められている。

歴史的都心部 : 6 ヘクタール
既存住宅地区 : 0.7 ヘクタール
新開発住宅地区 : 9.2 ヘクタール
都市再構成地区 : 0.4 ヘクタール
経済産業地区 : 16.8 ヘクタール
公共、公的施設地区 : 49.9 ヘクタール

ゾーニングの主眼は市街地の拡大の制御にある。メルカッテッロは明確にコンパクトシティをその基本としている。居住地区は歴史的都心とそれに連続する既存住宅地区、新開発住宅地区の合計 15.9 ヘクタールに限っている。そしてそれらは歴史的都心を生活の重心として意識するように位置づけられている。

歴史的都心 6 ヘクタールの保全は 1985 年の都市建設計画 P. di F. で位置づけられ、1988 年には地区詳細計画で保全の方法が明確にされている。既に 20 年以上の保全の実績があり、その間に多くの家屋の修復が進み、色彩基準が常識化し、重要建築物の修復活用が進んで、歴史的都心部の景観と居住環境は大きく向上している。

都市基本計画では景観に関する現在の課題を、歴史的都心周辺部の既存住宅地区 (0.7 ヘクタール) と新開発住宅地区 (9.2 ヘクタール)、そしてその外側に拡がっている田園や山林地帯の修景にあるとしている。

歴史的都心の周辺に拡大した新しい住宅地区の町並みには殺風景なところがあり、そのようなところでは都市の連続性の魅力をつくる必要があると指摘している。

都市基本計画は田園と山間部の生活風景の回復の重要性を強調している。農業と地場産業を盛んにして豊かな生活風景を回復する必要がある。そのことによって観光農業 (アグリトゥリズモ) を盛んにすることも期待出来る、としている。

1994 年策定の都市基本計画では計画人口を 2200 人 (当時の人口比 47% 増) としたが、今やそれが現実的でないことは明確である。

2200 人規模の経済力を持つには、山をトンネルで抜けてウンブリア、トスカーナへ繋がる東西の国土幹線の貫通が懸案だが、それもまた工事中断で遅々として進捗しない。イタリアの僻地、メルカッテッロでも成長戦略は頓挫しているのだ。そのことがかえってよい結果を得ているのではないかという、諦めとも、正論とも着きかねる声が一部の市民からは漏れている。

農業を含む地場産業を高品質の確かなものにすること、豊かな生活の風景を保全すること、それによって外部経済の活力を吸

引すること。外部の動向に左右されるのではなく、自分たちが引き継いできた生活を守り育てながら、その価値をブランド化するという、したたかで楽観的な戦略がそこに見て取れる。

■みんなで町を楽しむ Pro-Loco の活動

メルカッテッロ最大のお祭りは 7 月 14 日の地区対抗のロバ乗り競争だ。まだ 7 年目と、歴史は浅いが既に町一番の人気の祭りになっている。

その他に、子供カラオケ大会からクラシックのコンサートまでの多彩な音楽祭、炭焼きのステーキ祭り、広場でのバレーボールトーナメント、流れ星観測の夜の山歩きなど、多彩な催しが続く。これらは 7, 8 月に集中している。というのも、この時期には大勢の帰省客がメルカッテッロに帰ってくるのだ。学生たちはもちろん、遠くの都市で働く人たち、町を出て今や外国や他所の土地に住んでいる人たちが、夏のバカンスの時期に合わせて故郷へ帰ってくるのだ。彼らはそのために故郷に手入れの行き届いた住処を残している。そこに戻ってきて数週間を過ごす。あるいはお母さんが待っていてくれる実家で、お袋のパスタを食べて賑やかに過ごす。

夏場にはメルカッテッロの人口が 50% 増える。町役場はその対応に忙しくて、担当者は夏のバカンスは時期遅れにしか取れないくらいだ。そしてこれらのイベントに大きな力を發揮するのが、町おこしの NPO、Pro-Loco のメンバーだ。町の財政的補助も受けている。

メンバーは町のボランティアの有志 40 人程度。その内の 10 人ほどの理事が中心になって活動している。この数年は音楽家で町の文房具屋のグエッリーノ、建築家のガブリエーレのコンビが大活躍してイベントを盛り上げている。

町の祭りに年に 10 回以上ある教会行事は今も欠かせないが、世俗的な盛り上がりには欠ける。かつては生活のあらゆる面で教会の存在が大きかったが、今や Pro-Loco を始めとする市民行事が町の楽しみの主流になっている。

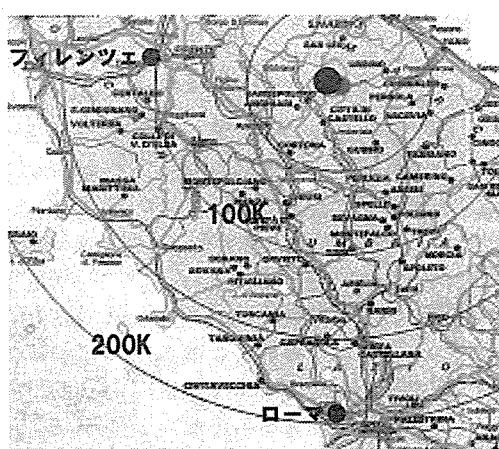
Pro-Loco は町の観光案内もやる。そのための環境整備にも意欲的だ。だから観光案内所が Pro-Loco の事務所になっている。しかし本当のところ、観光客といえる客が来るのは極めて稀な事だ。自分たちが楽しんでれば他所から客も来るだろう。他所者は

大歓迎だよ、何しろここは人里離れた田舎の町だから人恋しいんだよ、と言ってるよう私には思われる。

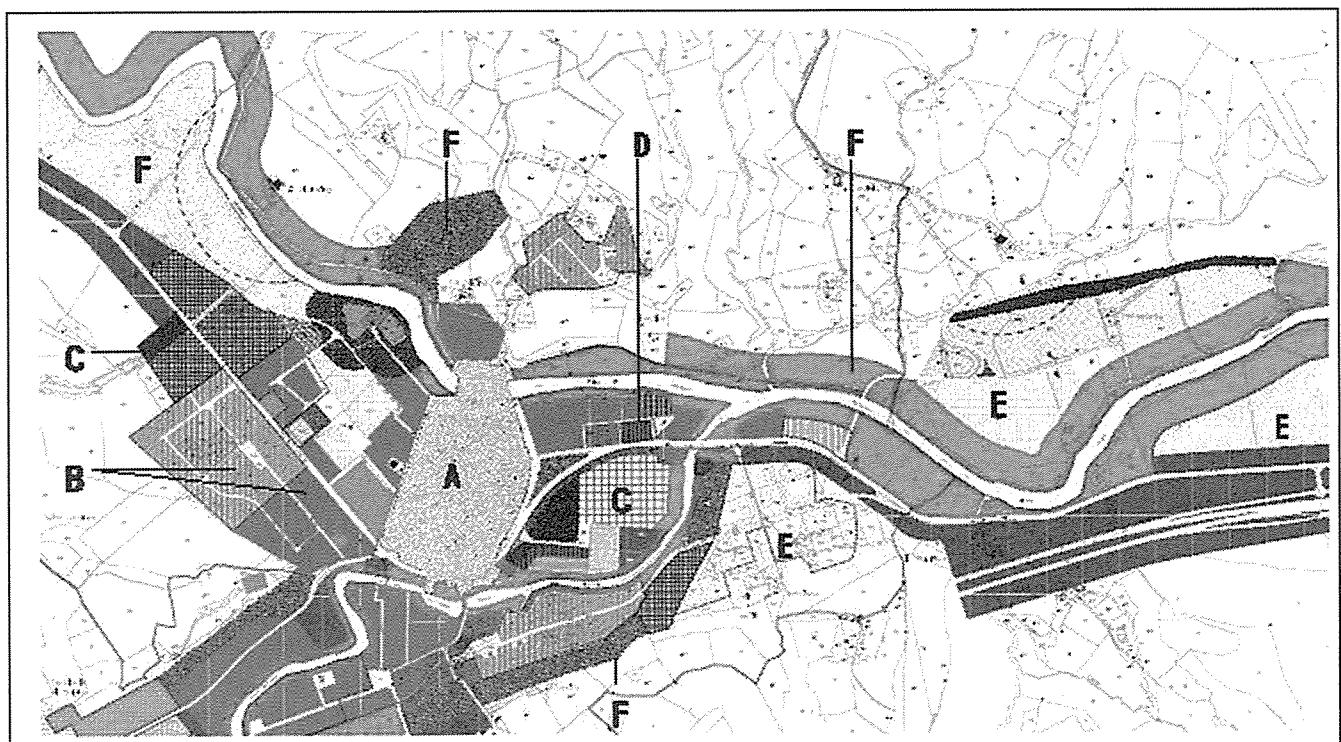
そしてメルカッテッロに住む楽しさは2泊もすればすぐに分かる。住んでると癒される、そんな別世界が、長い歴史を経て今は成立している。

JUDI メンバーの他に今年は、アメリカの若い声楽家30人が1ヶ月間、町なかで練習合宿した。オーストラリア人の数家族がやはり1ヶ月間滞在した。経済効果がどれほどかは別にして、町の人達にとってはやはり嬉しい出来事だった。

メルカッテッロの位置



メルカッテッロの中心市街地（チェントロ）



メルカッテッロの都市基本計画図

A 歴史的都心部 B 既存住宅地区

C 新開発住宅地区

D 都市再構成地区

E 経済産業地区

F 公共、公的施設地区

町の豊かさとは何か —JUDI 関西が見た イタリアの豊かさ

難波 健

KEN NAMBA
兵庫県

■散りばめられた小さな町

イタリアの都市と集落の話は、それぞれ基礎自治体、分離集落と訳されるコムーネとフラツィオーネについて理解することが重要であろう。イタリアには 20 の州があり、州は県により構成されており、県はコムーネの集まりで、多くのコムーネは複数のフラツィオーネを擁している。コムーネは市町村、フラツィオーネは大字とか町といったイメージである。

ヨーロッパでは、フランスのコミューン、ドイツのゲマインデ、イギリスのパリッシュがコムーネと同じような基礎自治体なのだと思う。日本の市町村は、国の誘導により平成の大合併が行われ、役所の経費節減を旗印に新しい市町に統合されてきたことと比べるとしっかりととした基礎自治体を厳として堅持しているヨーロッパの行政組織が全く異なっていると思われる。

イタリアに限らず、ヨーロッパの道路や鉄道から見える景観の日本との明らかな違いとして、集落と集落の間には建物がないことには容易に気づく。道路に沿ったいわゆるリボン状開発は建築許可では認められないし、住民も望んでいない結果として、農村部の田園と集落のメリハリのある景観が形成されている。その大きな理由の一つがフラツィオーネの成り立ちにあるのではないかと、今回のセミナーに参加して思い至った。

日本の都市部は、線引き制度により市街化区域と市街化調整区域に分けられ、市街化区域は建物で覆い尽くすことになっており、線引きを行わない区域はいわば田園地帯といいながら、そこには農村集落だけでなく、都市的な建物であっても条件さえ許せば自由に建てられる、というのが日本の都市的土地区画整理事業の現状である。

「行政で機能するのは市町と国で、県は不要ない、早く道州制に移行すべきだ」という論を展開する学者や政治家が多い。市町が住民に身近な存在として有効に機能することについて私は大賛成なのだが、では市町が機能するために国が市町を束ねることがいいのかどうか、しっかりしたコムーネが統治するイタリアの小さなまちに比べ、日本の市町の実力はどれくらいなのだろうか。きめ細かな住民の考えを汲み上げる行政組織としてどのようなものがいいのかをわれわれはしっかり見極めなければならない。

イタリアに 8100 あるというコムーネは、人口 250 万人を超えるローマから、最小の

コムーネの人口は 33 人だという。こういったフラツィオーネとコムーネがイタリアの農地と集落の景観をつくっていることをまず認識しなければならない。

意識の高い住民が居住するフラツィオーネは、歴史を踏まえた集落の形成を可能とし、その都市のヒエラルキーが独自の景観をつくり、それが観光にも結びついていると感じる。

■町のつくられ方

今回のセミナーで、メルカテッロに関する 4 人の専門家からレクチャーを受けて、イタリアのまちが何故観光に耐えるのかについて、いくつかの指針を得た。

メルカテッロは 2000 のイタリアの都市の中で 150 の観光都市の一つに選ばれたということであったが、その背景にはメルカテッロ独自の取り組みがあり、また国や州、県との確執もあったということである。

コムーネ独自の取り組みとして、旧市街の中心部、周辺、これから開発する区域と計画予定地に分け、集落周辺の農地の保全の方針を明らかにし、旧市街の歴史的価値の継承に積極的に取り組み、歴史的建物を尊重する施策、その結果は観光に行きつく。メルカテッロは住民参加で景観が守られているということであった。

この話を聞かせてくれたダニエル氏はメルカテッロで 30 年、建築・開発行政を受け持っているということであった。井口邸の改修計画でも、構造はもとより色に至るまで、彼とのコラボレーションがなければ承認されないとということである。もちろん、彼の指導、判断に反対する業者はおり、30 年の行政生活で 15 の裁判を受けたが、まだ負けていないと言っていた。裁判には勝てば行政が弁護士費用等を出してくれるが、負けると本人の負担となること、保険金は外科医と同じくらい払っていると言う。日本の行政とのシビアさは比較にならないようである。

給料はどれくらいもらっているかとの問い合わせには、夫婦と子供 2 人を養うには十分、ただ、ほかの行政でも仕事をして給料をもらっていると言っていた。

コムーネの財源確保のためには民間開発による税収も重要であり、市民の利益を確保する視点での保全と開発のコントラストは、メルカテッロの城壁の外側のイタリアンデザインの住宅地と城壁内の旧市街との対比やカステッロ・デッラ・ピエヴェの城を修復したホテル、レストランといったコ

ンバージョンも行政のP.P.（地区詳細計画）との共同作業によるプロジェクトであるということであった。

■豊かなまちの顔

今回訪問した都市にはそれぞれ豊かなまちの顔があった。

南部のアルベロベッロは有名なトゥルッリという土筆のようなとんがり屋根の建物が観光資源であるだけでなく、今も現役の農家のとして集落景観のポイントとなっている。

マテーラのサッシという谷間の崖に刻まれた地下住宅は、地下空間の使い方に工夫を加えながら、更に廃墟のリニューアルにより新住民をも受け入れているようであった。

北部イタリア、リビエラのチングエッレの5つの地区では、いずれも漁村の断崖を背に建つおそらくは漁師のアパートであった建物がリゾートの拠点に変身してそれらしい景観をつくっていた。

これらの顔は、過去の一時期に形成された遺産を壊すことなく一種のコンバージョンをしながら護ってきた結果であり、地図でみると護られたエリアと新しく拡張されたエリアが明確に示されている、これは上記の3つのエリアに共通した点であった。すなわち旧市街と新市街の対比が都市の豊かさの根本にあるように思われた。

簡単に言えば、古い建物が活かされることにより、新しい建物も生きてくる、これが計画的に行われていることにより、豊かなまちの顔が形成されている。

■豊かさをつくるために

最後に今回のイタリアセミナーで得た教訓を整理しておきたい。

① 変わらないことへのこだわり

メルカッロの都市計画の歴史を講演したダニエル氏は市の都市計画を3つの時代に分けて以下のようなコメントをしていた。
1918～1972 希望の持てない時期：土地利用規制が強化されて、旧市街地を定義し、開発可能なエリアを決めた。

1973～1995 自覚がない時期：移民が戻ってきて人口が増え、不法建築、開発に対する制度が策定される一方、計画許可が住民に知られず、住民にフラストレーションが起こる。

（しかし、別の言い方をすれば次の時代のメルカッロの都市政策は1985～1995の間にその全てが準備されていた。それはイ

タリア全土で展開された景観政策と地方分権の進展に歩調をあわせたものであると、井口勝文氏は補足している）

1996～2009 計画の時期：旧市街地の歴史的価値の継承、農地の保全のルールが確定され、土地利用計画と住民参加による景観保全が軌道に乗りつつある。

ともかく、旧市街地の建物は誰も潰すことは考えていない。その努力が今、観光として報われてきているという印象であった。

② 変えることの見極め

しかし、変わらないだけでは豊かさは得られない。旧市街地のまわりの計画市街地にはイタリアのモダンデザインの住宅地が形成されている。城壁の中と外の違いは歴然としている。一方、井口邸の改修でみられる建物内部の改装は見事に現代的な様相を呈している。窓のサッシやその色、外に面した扉やシャッターについては施主である井口氏とコムーネの建築担当であるダニエル氏との間で議論が戦わされたということであった。

③ 社会の仕組み

こういった特徴的なまちづくり、すなわちアドリア海沿いに連続して、またチングエッレのリゾート地に海水浴あるいは日光浴の客を迎えて開くパラソルの下の客の生活を考えてみる必要がある。

アルベロベッロはわれわれが1泊しただけであったが、ここ料金表示はウイークリーであった。公務員は、年間39日間の休暇の取得が義務づけられているということであった。彼らは休日を、移動型ではなく滞在型で過ごしていることは容易に想像される。

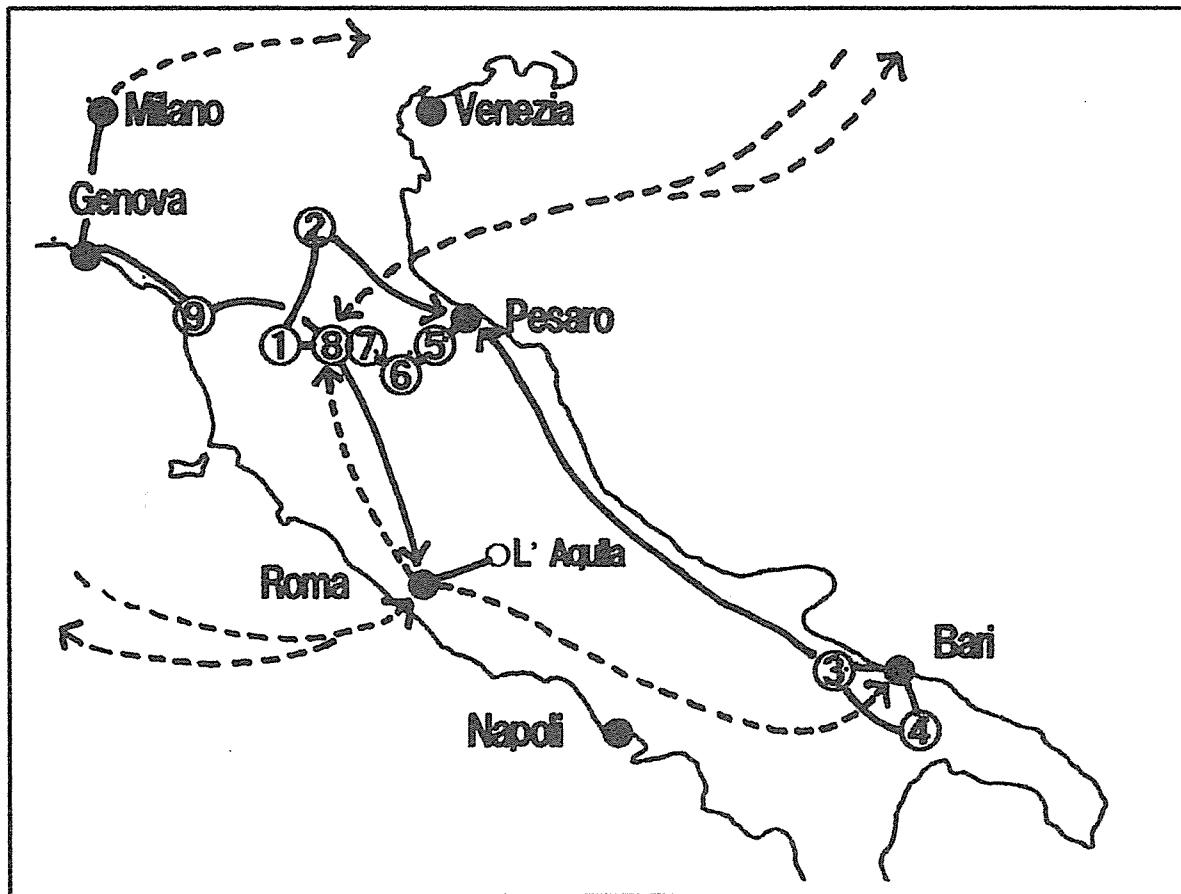
こういった社会構造が特徴ある都市の観光を支えているのである。

④ 専門家の努力

メルカッロで会った都市計画専門家、建築家のガブリエーレ、町おこし協会（プロローコ）のリーノ、行政のダニエル、そして都市計画家で建築家のパウロ・スパークがうまくコラボレーションしているのだと思う。

とりわけ日本で言えば一地方行政の担当者であるダニエル氏が、幅広く、地域の計画に深い造詣を持っていること、ここが豊かなまちの根本にあるのではないかと、日本の行政担当者として反省しきりのイタリアの印象であった。

JUDI 関西イタリアセミナー 訪問コムーネと移動コース



JUDI 関西イタリアセミナー 訪問コムーネ一覧

コムーネ(基礎自治体)名	分類集落数	州名	県名	面積(km ²)	人口(人)	人口密度
Aコース						
ヴィンチ(Vinci)	19	トスカーナ	フィレンツエ	54	14,308	265.0
①モンテカティーニ・テルメ(Montecatini Terme)	3	トスカーナ	ピストイア	17	20,024	1177.9
サン・ミニアート(San Miniato)	9	トスカーナ	ピサ	102	26,353	258.4
②ボローニャ(Bologna)	-	エミリア=ロマーニャ	ボローニャ	140.73	374,460	2660.8
Bコース						
パーリ(Pari)	2	プーリア	パーリ	116	328,458	2831.5
③アンドゥリア(Andria)	3	プーリア	アンドゥリアのフラツィオーネ	407.86	99,249	243.3
カステル・デル・モンテ(Castel del Monte)*	1	プーリア	アンドゥリアのフラツィオーネ	-	-	-
アルベロベッロ(Alberobello)	1	プーリア	アンドゥリアのフラツィオーネ	40	10,930	273.3
④チステルニーノ(Cisternino)	4	プーリア	ブリンディシ	54	12,052	223.2
マテーラ(Matera)	4	バシリカータ	マテーラ	387.4	59,569	153.8
コアセミナー						
ペーザロ(Pesaro)	20	マルケ	ペーザロ・エ・カルビーノ	126	92,002	730.2
⑤ウルビーノ(Urbino)	8	マルケ	ペーザロ・エ・カルビーノ	228	15,441	67.7
⑥マルカ泰ッコ・スル・メタウロ(Mercatello sur Metauro)	1	マルケ	ペーザロ・エ・カルビーノ	68	1,448	21.3
カプレージェ・ミケランジェロ(Caprese Michelangelo)	14	トスカーナ	アレッツォ	67.43	1,671	24.8
⑦キウジ・デッラ・ヴェルナ(Chiusi della Verna)	1	トスカーナ	アレッツォ	102	2,225	21.8
ポッピ(Poppi)	16	トスカーナ	アレッツォ	97.04	6,077	62.6
⑧フィレンツエ(Firenze)	16	トスカーナ	フィレンツエ	102	366,488	3593.0
アフターコアセミナー						
ラ・スペツィア(La Spezia)	9	リグーリア	ラ・スペツィア	51	94,263	1848.3
リオマッジョーレ(Riomaggiore)	2	リグーリア	ラ・スペツィア	10	1,740	174.0
マナローラ(Manarola)*	1	リグーリア	リオマッジョーレのフラツィオーネ	-	-	-
⑨コルニーリア(Corniglia)*	1	リグーリア	リオマッジョーレのフラツィオーネ	-	-	-
ヴェルナッザ(Vernazza)	1	リグーリア	ラ・スペツィア	12	1,031	85.9
モンテロッソ・アル・マーレ(Monterosso al Mare)	0	リグーリア	ラ・スペツィア	11	1,577	143.4
サンタ・マルゲリータ・リグレ(Santa Margherita Ligure)	3	リグーリア	ジェノヴァ	9.8	10,212	1042.0
ポルトフィーノ(Portofino)	1	リグーリア	ジェノヴァ	2	541	270.5
ジェノヴァ(Genova)	71	リグーリア	ジェノヴァ	243.6	611,949	2512.1
ミラノ(Milano)	-	ロンバルディア	ミラノ	182	1,303,670	7163.0

*フツィオーネ(コムーネとフツィオーネの関係は本文参照)

垣間見たイタリアのアグリトウリズモ (Agriturismo)

千葉 桂司

KEIJI CHIBA

(株) URサポート

■その1.「ドイツ人のバイクツーリズモ」

突然、大爆音と共に十台ぐらいのバイクの集団が、メルカテッロの町の中心広場へ突入してきた（写真1）。アメリカンフットボールのようなガードの上にバイクスーツを着た若者たちだ。ヘルメットを取れば長いブロンド髪の女の子もいる。聞けばドイツ人のグループで、イタリアの田舎町でマウンテンバイク・ツーリングを楽しむ一団であった。泥だらけ、埃まみれのバイクから、かなりの田舎道をツーリングして來たことが分かる。広場は、たちまち休憩で立ち寄った突然の訪問者たちと村人たちとの交流で賑やかになった。

丁度この時、この町のチェントロストリコ〔歴史的中心〕広場で、我々の昼食会が始まるところであった。広場の端に並べられたテーブルには、たくさんのハムやチーズや料理と共にワインが並ぶ。隅では名物「豚の薄切り」料理が始まり、辺りに香ばしい香りを漂わせる。食べきれない料理に、先ほどのドイツ人ツーリストたちを招くと、ひときわ賑やかな会話が弾んだ。

多くの旅行者が訪ねるトスカーナの豊かな風景と、村々のアグリツーリズモは人気が高い。丘の更に向こうにどんな風景が見えるのか、訪ねたくなる気持ちがよくわかる（写真2）。

○「アグリトゥリズモ」のこと

この言葉は、Agriculture(農業)と、Turismo(観光)という2つの言葉をつないだ造語である。一般には「農場が営むツーリストのための滞在施設」を指し、農家で採れた農産物などをゲストに供する、あるいは「都市と農村の交流」などとある。そこに共通するのは、都会の人たちの自然や農村への憧れと、農村の経済的安定やスローな生活文化との触れ合いの双方が期待されている。とはいって、そこは日本人の旅のスタイルと大きな差があるようだ。欧米人には長期型・滞在型が多いのに比べて、日本ではまだまだ短期型・周遊型が中心である。農村や農家でのこうした観光への取組みや、施設整備も大きく遅れてもいる。そもそも日本人の旅のスタイルも変わっていい頃かもしれない。

■その2.「修復されたカントリーハウスでのフルコース」

都市国家の歴史をもつイタリアの田舎を行けば、遠くの丘や山のてっぺんに城壁や塔の建つ小さな集落が幾つも目に入る。さて、メルカテッロから西へ約2Km、我々はそんな風景の中にある村を訪ねた。村の名はキャステッロ・デッラ・ピエーヴェ（写真3）。街道から外れた丘の上にぽつんと、その村は見えた。なんとそこでの昼食は、

写真1



写真2



写真3

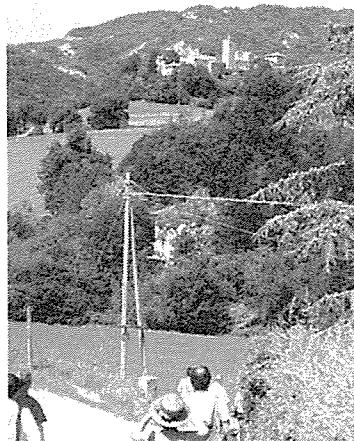


写真4



この旅行中唯一のフルコースと聞いて驚いた。廃村になっていた数軒の集落を修復し、ホテル・レストランとして再生。他には小さな塔のある教会だけ。食事は民家の庭先に日よけテントを張った席でいただく。しかしそこからぐるりと見渡せる周囲は絶景である。地の野菜や肉などの食材を使った美味しい料理が次々と出てくる。地元のワインを飲み、前菜からメインディッシュまで賑やかな食事は続いた（写真4）。時間は只々たゆたうだけだ。

さて、これにはオマケがついた。仲間の1人、学生のM君が料理の1つにアレルギーを起こし突然倒れてしまった。こんな田舎で救急車が来てくれるかと大騒ぎになつたが、レストランのオーナーが親戚の医者を呼んでくれた。なんと驚いたことに、来てくれた医者は、つい先ほどメルカッソロで訪ねた領主館（Palazzo Ducale）のご主人だったのだ！この方のおかげで、M君は事なきを得たのはもちろんある。イタリアは広いが世間は狭い。治療費も受け取らないドクターのおかげで、我々は既に陽が傾きかけた時間の経過も忘れて、気持ちのよい田舎の食事と空気と、そして人情をもった1日であった。

○「カントリーハウス」とは

この集落の入り口には「カントリーハウス」の標識（写真5）が掲げられていた。これはアグリツーリズモの宿泊施設とすることを前提に、田舎の家屋を改修する融資や助成を、州や町から受けた施設であることを表す公認標識である。

■その3. 「オレンジの旗」の誇り

メルカッソロの役場で、我々は町の歴史や都市計画、プロジェクト開発などについて興味深い講義を受けたが、この築後数百年の役場の入り口に、目立たない小さな旗のマークが貼られていた（写真6）。これは

写真5

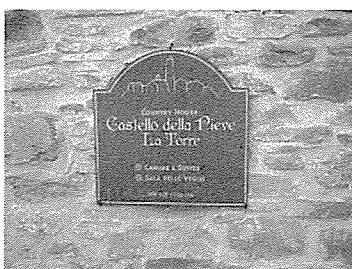


写真6



「オレンジの旗」と呼ばれ、「ツーリズムクラブ・イタリアーノ」（イタリア旅行協会と訳される*）が選んだ「イタリアの豊かで小さな地方都市」の認定マークである。全国約2000の地方小都市から145の都市が選ばれ、メルカッソロは2002年に選ばれた（2009年の資料によれば現在160都市）。基準は人口5000人以下、歴史的資源と生活文化を守ってきた小都市を表彰するもので、ゴミに関するエコロジーへの取り組みも評価基準の中にある。これをクラブが3年毎に審査し決定する。メルカッソロの誇りである。

*「ツーリズムクラブ・イタリアーノ」（TCI）は、自転車旅行の愛好家によって1894年ミラノで設立。歴史と権威のある独立非営利法人で会員は50万人。旅行文化の普及と振興を図ることを目的に、旅行代理・施設経営・出版などの事業を展開する。

○「プロローコ」（Pro-Loco）のこと

上記TCIの小都市の紹介誌には、その都市毎の観光案内センターとして「プロローコ」の名が出てくる。我々も町の案内にはプロローコのお世話になった。この観光情報の提供や旅行案内センターの役割を担う団体は、イタリアで約40年前から始まったボランティア組織である。都市毎に独立し、日本で言えば特定都市のNPOまちづくり団体である。歴史的文化財などの資源保護や推進、あるいは音楽コンサートや展覧会・祭りなどのイベントも開催する。活動は行政と教会そしてプロローコの3者が協力し、地元を巻き込んで行われる。運営資金は町からの補助金や寄付と、メンバー（専門家）の出版事業など自ら稼ぐ資金で運営されている。ちなみにメルカッソロのプロローコの代表者は町の文房具屋さんであった。

■その4. 「B & B」のもてなし

人口1500人の町に、10年前は1軒だった宿泊施設が今10軒ぐらいに増えたそうだ。「オレンジの旗」のせいか、近年村を訪れる旅行者は増えているそうである。我々の泊まった小さなB&B“ソッコルソ”は、メルカッソロの町はずれを流れる小川のほとりにあった。B&Bの朝食は、広い庭の藤棚の下にテーブルをしつらえ、お手製のパンやケーキにジャム、それにチーズやハム、果物が盛られている（写真7）。気さくなオーナー夫婦のもてなしを受ける。清々しい朝の空気のなか、とてもアットホームな気分でカプチーノを飲みながら会話が弾んだ。その夜は井戸邸に村の人達を招いてパーティー（写真8）を開き、その中で催

した日本式「お茶会」では 70 人以上の町の人たちに和菓子と抹茶を体験してもらつた（写真 9）。

田園のスローな時間に身を置いて、町の人たちの暮らしを垣間見、時に一緒に楽しむ、こうしたアグリツーリズモの旅は、至福のライフスタイルかもしれない。

○この 3 つ、何処がちがう？

「アグリツーリズモ」「カントリーハウス」そして「B & B」とは、井口氏から入手した 10 件の宿泊施設一覧表に記された 3 つのタイプ分類である。「アグリツーリズモ」タイプが 6 軒、「カントリーハウス」タイプが 2 軒、そして「B & B その他」タイプが 2 軒。聞くところによれば、①お百姓が農家の副業として農家民宿するのがアグリツーリズモ、②田舎だけど農家ではない民家を修復したのがカントリーハウス（食事なし？）、そして③田舎でも農家でもない民宿が B & B だとか。さて泊まる我々からすれば料金は別として、何処も快適さに変わりはないと思えるのだが・・・。

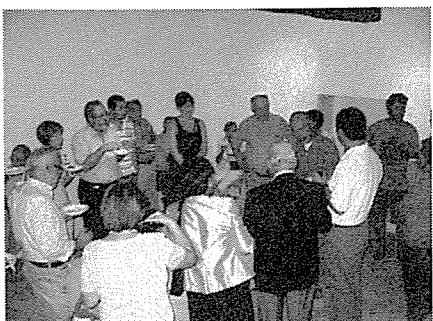
■その 5. 「ポッピのワイン祭り」

いよいよメルカテッロを去る日の朝、8 時半に村の入り口に集合した我々は予約したバスを待った。しかし待てど暮らせどバスは来ない。やっと連絡の取れた運転手はまだ家にいた！ここから 2 時間はかかる街から来るというから驚きだ。しかし「これがイタリアだ～」とか。いつ来るとも分からぬバスを、爽やかな木陰のカフェで待つこの時間が、不思議と気持ちいいのはなぜだろう。去りがたいメルカテッロへの思いからか、或いは諦めて待つ我々の体の中

写真 7



写真 8



にはやイタリアの時間が流れていたせいだろうか。

お昼前にやっと着いたバスに乗り込み、ミケランジェロの生家のあるカプレージエ・ミケランジェロ村に立ち寄り、イタリアの高野山といわれるサンフランチェスカ修道院を経由した後、我々は目的地のポッピに着いた。丘の上の城壁に囲まれた旧市街にあるホテルへの道は、祭りのため既に車は進入禁止となっていた。

この町で年に 1 度の銘醸ワイン試飲のタベ「ワイン祭り」が、今夜開かれるのだ。始まるのはなんと夜 9 時から。我々はホテルでの夕食もほどほどに街に繰り出した。街のチェントロストリコ広場と 1 本しかしないメインストリートには、花で飾られたワイン樽や荷車が置かれ、テーブルは既にすごい人で埋まる（写真 10）。こんな村でも通りに面した連続する家々の 1 階は全てポルティコが連続し、奥はお店になっていた。近郊で製造されたワインが所狭しと並べられ、チーズやハムやら農産物が売られる。11 ヨーロ払うとワイングラスと首から吊るす袋をくれる。それにグラスを入れてぶらさげ、16 箇所ある銘柄別ワイン売りの店から、気に行ったワインを 4 回利き酒できる仕組みになっている。

観光として売り物にしている風もなく、ただそこに暮らす人々の楽しみと、近郊の人々との賑やかな触れ合いが夜中いつまでも続く。美味しいワインを味わい、ほのかな酔いと街の喧騒が心地いい。小さなイタリアの田舎に暮らす人々の、明朗で豊かな暮らしの一端を見た垣間見た 1 夜であった。

写真 9

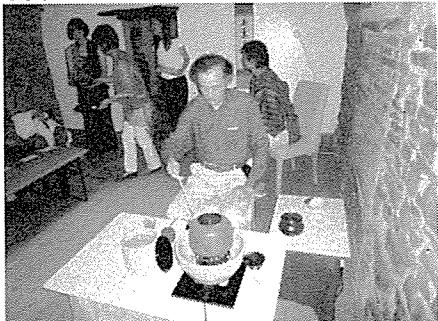


写真 10



アグリトウリズモの 極意

角野 幸博

YUKIHIRO KADONO
関西学院大学

戸惑うご主人

町の広場から漆黒の山道を車で 10 分足らず、我々の宿は小高い丘の中腹に、控え目に建っていた。井口氏の宿泊施設 3 分類（アグリトウリズモ、カントリーハウス、B&B）に従うと、典型的なアグリトウリズモ民宿である。

石積みの母屋の仄暗いダイニングに通されると、ご主人が地酒の赤ワインをふるまってくれた。おかみさんも顔を出しが、二人とも英語はほとんど通じない。陽気で騒がしいイタリア人というより、朴とつて人のよいお百姓という印象。これから 3 日間どうやって遠来の客をもてなそうかと戸惑っているようだ。夕食の飲み疲れもあって、早々に部屋へ案内してもらう。

部屋は母屋の裏にある別棟。2ベッドルームにシャワー・トイレが付く。もちろんテレビも冷蔵庫も LAN ケーブルもない。酔い覚ましに椅子を外へ持ち出し、夕涼みを決め込んだ。満天の星空は、万国共通の田舎のもてなしである。こうして我々のショートステイが始まった。

アグリトウリズモのもてなし

農家の朝はどこの国も早い。夜明け前からニワトリが鳴きだす。朝露が降りる敷地内には、ニワトリ以外にもアヒル、ロバ、ネコが歩き回る。観光客とは無関係に、それぞれの動物の一日がいつもと同じようが始まる。そこはかとなく匂ってくるのは、牛かロバの糞だろうか。

朝食はパンとカプチーノそれに自家製の焼き菓子。テーブルの上にはこれも自家製のジャムやマーマレードが無造作に置いてある。台所でおかみさんが何やら作っているのだが、我々の食卓とは関係ないらしい。

我々のアグリトウリズモ体験はここまで。朝食を終えると、ご主人に町まで送ってもらう。「小さな町の豊かな生活」を垣間見ることはできても、なかなか実践とまではいかなかつた。それでも気付いたことはいくつもある。

日本で農村観光というと、農村風景を眺め、かたちばかりの農業体験をし、地元の野菜を食べ、「乳搾り」か「そば打ち」か「草木染め」をするようなイメージをもつ。子供連れならこれに昆虫採集か魚釣りが加わる。すべてが予定され、用意されたアトラクションである。それに比べてメルカテッロの農家民宿には何もない。体験したのは、漆黒の闇と静寂、朝露、動物の鳴き声と匂い、農家の簡素な朝食くらいだろうか。仮に昼間、町へ出ずに農家にいたとしても、何もしなかつただろう。そして退屈したに違いない。

だが我々の体験こそが、アグリトウリズモの本質でありスタートなのかなと思う。農村の日常生活と観光との間をつかず離れず行き来するために、まずその空気を体験する。空気とは光、音、匂いである。そして退屈する。退屈するから、何か新しい物事を自分で見つけることができる。暇つぶしに散歩すれば、野ウサギやキジに出会えるかもしれない。アグリトウリズモの喜びとは、地元の人に親切にもてなしてもらうことではなく、なつかしさと退屈さの間に隠れる微妙な違和感の中から何かを見つけることなのだと気づく。

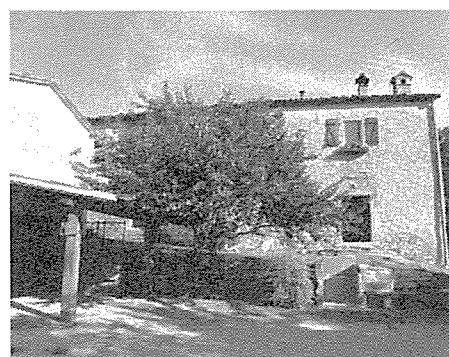
アグリトウリズモの可能性

とはいものの日本では、そんな楽しみが誰にでも素直に受け入れられるとは思えない。滞在期間の長短にかかわらず、観光客は様々な体験メニューを期待し、地元は観光客をもてなすことに一所懸命になる。そうしなければ地域振興や村おこしにつながらないと思ってしまう。

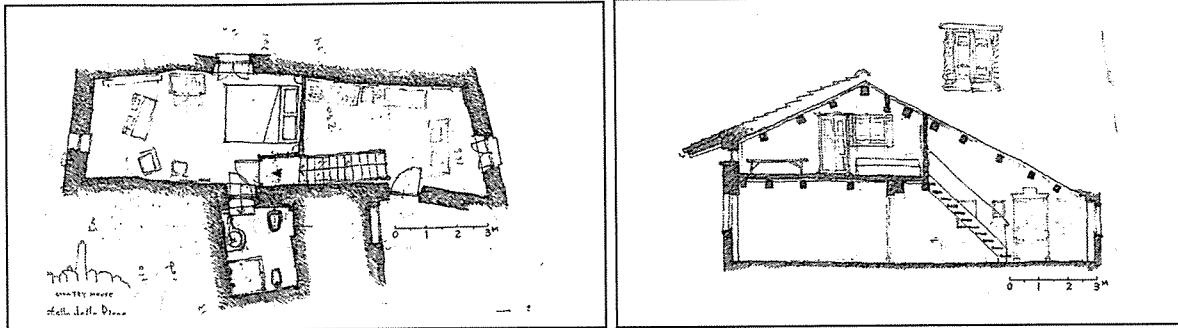
農村観光が生活と観光の接点の魅力を探るものである以上、地域ごとの農業形態と生活文化に応じたやり方があつてしかるべきだと思う。私を含めて多くの日本人は、料理やファッショントをはじめイタリア文化に親しみと憧れを感じている。ポー川流域では、ヨーロッパでは珍しい米作りも行われている。イタリアの村で感じるなつかしさの理由は、ここにあるのかもしれない。

しかし、いや、だからこそ、日本は独自の農村観光のあり方を探る必要がある。そのためには、パッケージ化しつつある観光メニューを見直し、退屈してもらうことから本来の魅力を探しなおすという試みも必要だと思う。

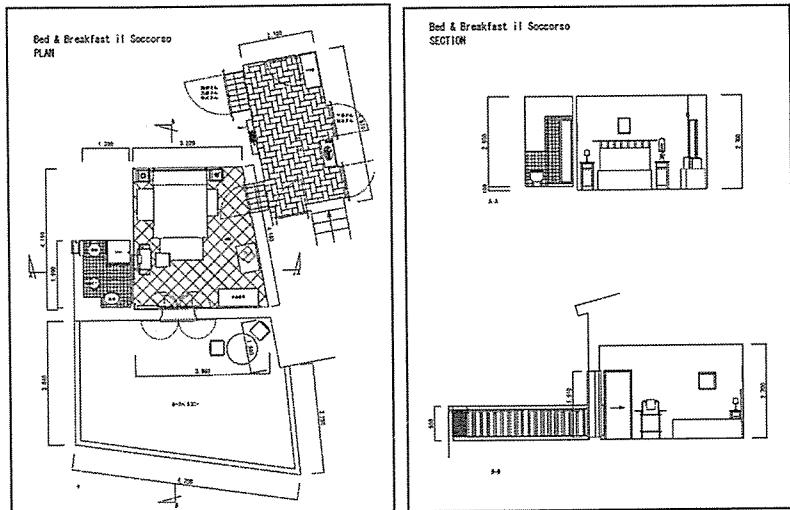
忘れてならないのは、イタリアの今の農村生活の魅力は、町との関係が緊密という点にある。我々を送り迎えてくれた御主人も、メルカテッロのバールの常連だった。日に幾度となく町へやってきて、買物や仕入れの合間に町を楽しむ。小さな町の豊かな生活は、町と農村とのコンパクトな関係で成り立っている。このことは、日本の農村も肝に銘じておくべきである。



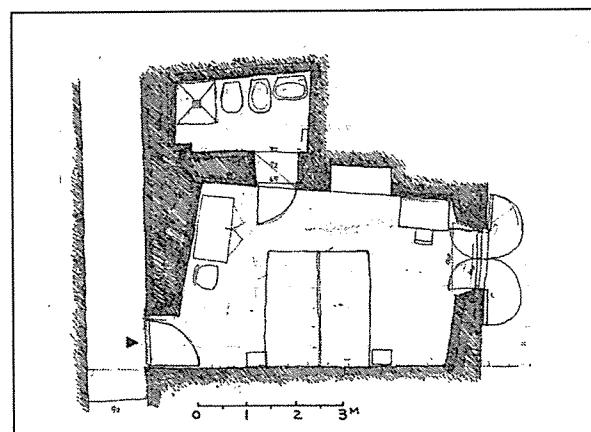
■ JUDI メンバーが宿泊したホテルのプラン



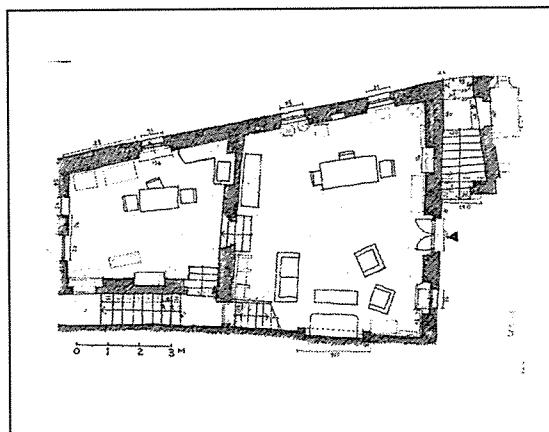
カステッロデッララビエーグエ（メルカッロ郊外） 寝室とビーチ 作図 江川直



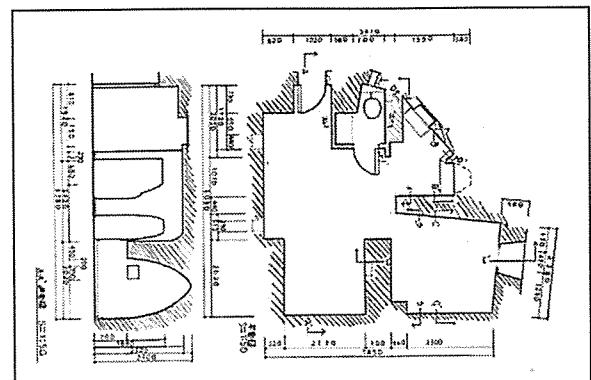
B&B ソコルソ（メルカッロ） 作図 若本 和仁



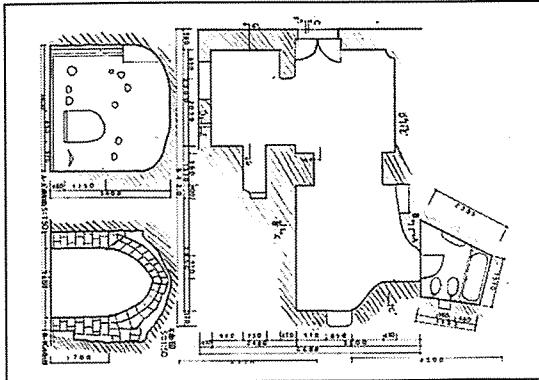
カペターニア（メルカッロ） 作図 福留 由莉子



カステッロデッララビエーグエ ラウンジ 作図 福留 由莉子



アルベロベッロのトウルツリ 作図 宮田 卓・前田 博



マテラのサッシ 作図 作図 宮田 卓・前田 博

■ルネッサンスの3巨匠その生家を訪ねると....。

井口 勝文 京都造形芸術大学

イタリアの元気の
源は、チェントロ ミ
ノーレ(小さな町)に
ある

レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ・ブオナッソロティ、ラファエッロ・サンツィオ。この3人がルネッサンス芸術の3巨匠と言われているのは、誰でも知っている。

ではその生家は?

レオナルドの生家があるヴィンチ村を訪ねたことがある、というJUDIメンバーは多分居るだろう。フィレンツェの郊外だから比較的訪ねやすい。

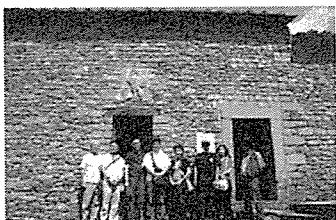
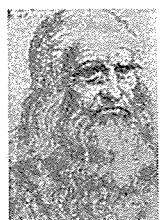
ラファエッロの生家には行ったことがある、という人も居るだろう。世界遺産の町、ウルビーノの町なかだから、ウルビーノは遠いけどそこまで行けば必ず訪れる名所だ。

フィレンツェの町なかにあるミケランジェロの家を訪れたことはあっても、彼の生家に行ったことのあるJUDIメンバーは、居ないかもしれない。生家のあるカプレーゼは今

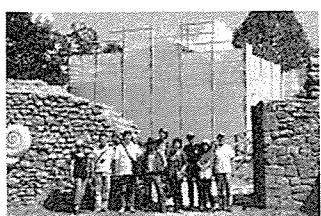
Raffaello Sanzo (1493~1520) の生家の前で



Leonardo Da Vinci (1452~1519) の生家の前で。



Michelangelo Buonarroti (1475~1564) の生家の前で。補修の工事中でした。



でも辺鄙なところだ。フィレンツェから東に山を越えて車で3時間ほどかかる。カプレーゼとは山羊を意味する単語で、昔この辺りは羊飼いが放牧で泊まり歩いてただけの山間の地だ。そんなとこから着いた地名だと案内書には書いてある。そんなさびしい場所にミケランジェロの生家はある。

ではこの3箇所を全部訪れたことのある人は居るだろうか、それも7日以内に3つを一気に見比べて回った人は居るだろうか。JUDI関西のメンバーが今回はそれをやつたのです。「快挙である!」と言って欲しい。

何の為に、何を見に行ったのか。やはりそれをあなたは聞きますか?

生家は、行ってみればどれもたいしたこと無い。「これだけ?」という感じ。

そこに何かをくっつければくっつけるだけ、「生家」のもともとの空気が失われていく。当時を偲ぶ想像力が萎えてくる。耳を澄ましても、550年前のレオナルドの声が聞こえなくなる。

世界の名所に相応しく、そこには何も無い。そこで生まれたという事実だけがある。

そのことを確かめに、我々は行きました。一気に3箇所を巡ることで、「何も無いことを見に行く見学ツアー」が成立したのです。

町なかにあるラファエッロの生家は別として、他の2つは何れも辺鄙なところにはぼんとある。

3箇所ともそれらしい案内板は何も無い。余程気をつけてないと見過ごしてしまう。ラファエッロの生家は町並みの中に埋もれているし、レオナルドとミケランジェロの生家は自然の風景の中に隠れている。

これこそ名所づくりの名人技ではないでしょうか。見習って欲しいところが日本にはたくさんありますけど、。

MASAHUMI INOKUCHI

加藤 晃規 関西学院大学
AKINORI KATO

EU の都市戦略

創造都市ボローニヤとして脚光を浴びているがその最近の成果や如何に？ 2009 年の8月末、ボローニャゼミの参加者と共に酷暑の街中を視察した。EU の創造都市と言えばバルセロナ市やナント市も評価が高いが、それらに共通する点は市の芸術文化政策の特徴であろう。ヒストリックセンターの伝統文化と未来指向の現代芸術を、創造的、空間的、都市戦略的にハイブリッド化して見せている。

チェントロ・ストリコ住宅修復事業

チェントロ・ストリコの中心マッジョーレ広場から南へ 700m ほど下るとかつての聖マモロ門跡がある。この城壁門の内側にソルフェリーノ地区がひろがる。1960-70 年代の密集市街地修復事業の傑作で、いわゆる「類型学的保存」の典型版だ。街区内の敷地割りや建築様式を類型的に残すことで庶民住宅地の景観を守り、同時に現代的な都心機能も果たしている。その一角で複数画地を占有したホテルが開業していた。若い起業者が経営するプチホテル「Hotel Porta San Mamolo」だ。暗いポルチコからホテルフロントに入ると、光が差し込む裏庭にレストランが作られており、その設計にはチェントロ・ストリコ内での苦労の跡が伺われた。こうした修復事業がチェントロ・ストリコ内の 13ヶ所で行なわれている。

宗教建築物の用途転用

ソルフェリーノ地区を後にして歴史的地区内に点在する教会遊休資産を巡った。大半が大学や高校あるいは寄宿舎やミュージアムに用途転用され、いずれもボローニヤ市の文化振興と都心景観に寄与していた。そして、こうした修復転用は教会遊休資産だけでなく、世俗的建築物の宮殿や工場にも及んでいた。

近代産業遺産の修復

市庁舎横のダックルシオ邸はローザ博物館として修復され、市のアーバンセンターが設けられていて様々な未来プロジェクトを展示していた。そのなかに磯崎新氏による新ボローニヤ駅の設計図面を見たことは驚きであった。また、チェントロ・ストリコの北西部、ラーメ門の周辺では近代産業遺跡を活用した約 10ha の面的修復事業が進められていた。現代芸術のメッカを目指す「マンボ (Museo d' Arte Moderna di Bolonga)」と旧タバコ工場を転用した映画博物館を訪れたが、港湾地区だったこの地の歴史的記憶をアルド・ロッシ氏が基本計画のなかで如何に処理したのか、両館長のレクチャーから示唆深い情報をいただいた。

歴史的規制と創造性

厳しい歴史的規制が都市の創造戦略や開発事業に役立ち、革新的な環境すらもたらす事例を見せられたボローニヤのチェントロ・ストリコであった。



ソルフェリーノ通りの類型的修復景観



ローザ美術館内のアーバンセンター



マンボと映画博物館を抱える旧港湾地区の修復



レーノ水路通りの映画博物館（旧タバコ工場）

■アルベロベッロ Alberobello のトゥルッリに住む

堀口 浩司 地域計画建築研究所
KOUJI HORIGUCHI

アルベロベッロは数センチの厚さの石灰質岩を積層させた円錐形の屋根（トゥルッリ：IL TRULLO）が特徴的な住宅群で有名なまちです。

このトゥルッリはサレント半島に多く見られる住居の形式であり、一つの部屋で一つの円錐形の屋根を支えている。そのため、それぞれの部屋の中はカーテンなどで間仕切りされている。

このような形状になった理由として、16世紀後半から入植者が増え始め、当時の家屋ごとの課税を逃れるため、簡単に屋根を取り壊せる構造にしたという説がある。

さらに乾燥した気候の元で雨水を有効利用するための構造が用意されている。円錐形の屋根で受けられた雨は、傾斜によってを集められ、水路を通して、床下の貯水槽に貯められ生活用水に使われている。

アルベロベッロは世界遺産として有名な観光地でもあるので、世界中から多くの外国人旅行者が訪れている。改修したトゥルッリは宿泊所として貸し出している。

建物としての構造や経緯は書籍やテレビなどで紹介されているので、詳細な説明は省略して、ここでは体験談とする。

なお、我々が滞在したのは8月、夏の終わりである。



(トゥルッリが集中した地区では小さい屋根が細かい陰影になって見える
google map)

トゥルッリは現在も現役の建物として活用されている。その用途は住宅、店舗、宿泊所など様々であるが、構造を変えずに建物を動態保存している。

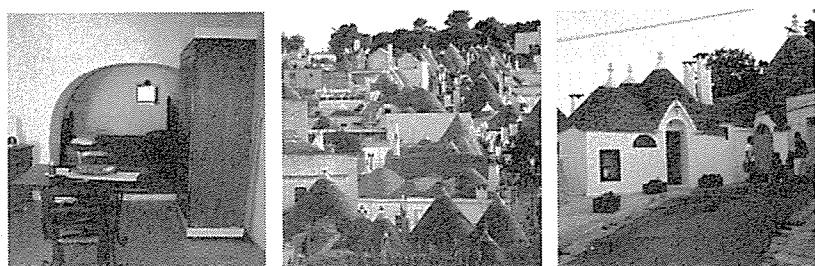
保存活動を進めているNPOが宿泊所として短期滞在から1週間単位のレンタルなど様々なサービス提供を行っている。

地区内には現在も住宅として利用しているもの、何らかの理由で空屋になったものなど混在しているため、我々JUDIメンバーも地区内に点在する家屋に分かれて滞在した。

住宅としての印象は、窓が小さいため室内が暗く風が抜けない、加えて建物の平面が円形であるため壁が湾曲しており、壁から離れて置かれた家具の収まりがわるい。床とバスルームの扉以外は、壁、天井とともに湾曲しているため、何となく落ち着かない。反面、天井が高いので圧迫感はなく、間仕切りがないので結構広く感じる。壁が厚いため、遮音性能が高く、外壁の断熱効果も高い。ニッチに照明や花瓶、写真を飾るなど意匠としても優れている。

当然ながらエアコンはない。夏の南イタリアは日差しが強く、空気も乾燥しているため、湿度が低ければ快適な住宅であろう。我々の滞在した時期は、生憎と室内の湿気も高く、屋外に出て夕涼みをすることにした。隣家の滞在客も同様に夕涼みしている。夕暮れ時は、家の中より外部の方が涼しいため、外部空間の役割が大きい。

道路と建物の間に、数十センチ程度、壁面が後退した空間があり、自家用車を乗り上げて止めたり、写真のようにフロアポートをおいたり、椅子を持ち出して座ったり、様々な使われ方をしていったのが印象的である。



小林 郁雄 神戸山手大学
IKUO KOBAYASHI

イタリア南部、長靴の土踏まずのあたりにバシリカータ州マテーラはある。古くからグラヴィーナ渓谷の荒涼としたカルスト地形の谷間に、7000年前の新石器時代から洞窟住居（サッシ）がつくられ、特に8世紀頃から迫害を受けてギリシャから移住した多くの修道士が住み着き、100以上の洞窟教会もつくられていたという。13世紀に丘の上に大聖堂（ドゥオモ）が建設され、街の最盛期の15世紀には3300あまりの住居に2万人の人が住んでいた。

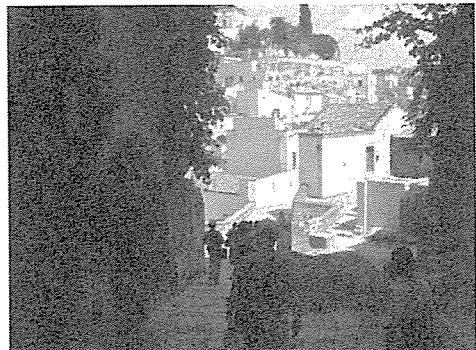
しかし、時代を経て20世紀には洞窟住居都市は巨大なスラムと化し「イタリアの恥」と言われるまでになり、洞窟住居は赤痢などの疫病の温床と劣悪な居住環境から、全住民強制退去が1952年にイタリア政府によって進められ、新しい住居としてマテーラ郊外にニュータウンが建設された。（2009年3月29日放送のMBS毎日TV「The世界遺産」を参照した）

今回の旅行では、主目的のメルカッソロのセミナーに集結する前に、南北両コースにわかれていタリアを訪ねたのだが、アルベロベッロと共にこのマテーラが南コースの目的地であった。

半世紀前に廃墟となった洞窟都市マテーラが、1993年世界遺産に登録されるに至った訳なのだが、それは今どのような状況なのか？

丘の上の「市民の街」の広場から階段を下りていくと、斜面にへばりつく家々が重なっている。それぞれが洞窟住居で、その多くはホテルになっているようで、レストランなどもみられる。谷を挟んでかつて住んでいたであろう多くの穴居跡が今も遠望できる。

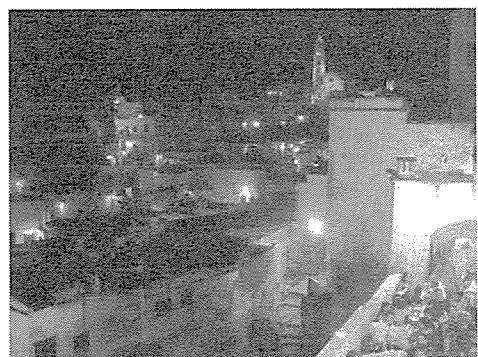
一度は無人の街となったサッシは昔の洞窟をリニューアルして、新しい住居、観光施設として生まれ変わりつつあった。そこには昔からの小さなコミュニティを基本にしたニュータウンには無い暖かな生活を取り戻した新住民と観光客の融合した街がよみがえっていた。



市民の街から洞窟都市へ降りていく



洞窟住居（サッシ）都市マテーラの全景



観光都市マテーラ（右下がレストラン）



丘の上の市民の街のドゥオモ前広場

江川 直樹 関西大学
NAOKI EGAWA

イタリア半島中央を南北に縫うアペニン山脈の中、トスカーナ州とエミリア・ロマニャ州の州境にあるカゼンティーノの森・フォルテローナ山・カンピニャ山国立公園という、複数の山と森からなる国立公園に、アッシジの聖人フランチェスコ (Francesco d' Assisi=聖フランシスコ)が頻繁に滞在したという聖地ラ・ヴェルナ (La Verna) がある。

今回のセミナーに絡めて、私たちは、レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-)、ミケランジェロ (1475-)、ラファエロ (1483-) の生誕の家を訪れるという余興を目論んでいたのだが、あわせて、世界最大の修道会、フランシスコ会の創始者、聖フランチェスコ (1181-) が聖痕を授かった地を訪ねるという機会に恵まれた。

このセミナーのテーマは、「小さな町の豊かな生活」であり、「メルカテッロのアグリツーリズム体験」でもある。アグリツーリズムとは、広義には「都市と農村の交流」であるが、実際には、農場で休暇を過ごすことである。その背景には、自然調和の生活の再評価ということがある。後に述べるように、歴史学者のホワイト (1907-1987) は、聖フランチェスコを「エコロジストの本尊」と呼び、1979年には、ヨハネパウロ2世が「環境保護の人々の守護者」と選定した。また、聖フランチェスコは、自分たちの集まりを「小さき兄弟会」と呼び、「小さき」と「兄弟」という二つの概念によってこの共同体の本質を示している。

聖フランチェスコの聖痕

フランチェスコは裕福な家庭に生まれたため放蕩生活を送っていたが、騎士になろうと思いつち、対ペルージャ戦に参加するが、捕虜になり、病気にかかるなどした。1206年頃から改心が始まり、家を出て、ハンセン氏病患者に奉仕し、荒れ果てた聖ダミアノ聖堂の修復を行うなどし、1208年に福音書の三節を自らの戒律とし、活動を始めた。戒律は全ての財産を放棄して福音を説くことを求めるものであった。弟子たちとともに各地を放浪し、説教を続けた後、1210年、当時のローマ教皇であるイノケンティウス3世に謁見し、修道会設立の許可を得る。

1213年、聖フランチェスコに感銘を受けたカターニ伯爵は、伯爵が所有していた荘厳なままでに原始的なラ・ヴェルナ山を、聖フランチェスコに譲り、以来、聖フランチェスコはしばしばここに隠遁し、孤独の中で修道に励んだ。

1224年の夏、40日間の断食中、主キリストが現れ、聖フランチェスコの両手、両足、そして

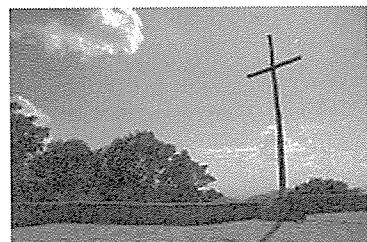
脇腹に、キリストが十字架に貼り付けにされた際に受けた傷同様の傷（聖痕）が刻印されたという。聖地は標高 1200 メートルの森深い山中があり、真夏でも肌がひんやりとして、禅寺のようなひっそりとした雰囲気である。今でこそ修道院や教会があるが、寝泊まりしていたベッド代わりの洞窟の中の石、瞑想をした苦むした岩場、悪魔と戦ったという切り立ったがけなどが今なお残る。

エコロジーの始まり

エコロジーの年表は、「兄弟なる太陽、姉妹なる月」と靈的平等を説いた聖フランチェスコから始まるといわれる。聖フランチェスコは、太陽、月、風、雲などの自然現象まで万物すべて神の兄弟として敬った。火のそばに座った聖フランチェスコの服に火が燃え移っても消そうとせず、兄弟よ、火の邪魔をしてはいけないと言ったり、木を切るときには丸ごと切り落とすのではなく、木が生きていけるようにある部分は残すように命じたり、すべての土地を野菜のために耕すのではなく、いくらかの野の草花のために残しておくようにさせたという。キジ、野兔、ひばり、タカ、コオロギ、魚、羊からも慕われたという。聖フランチェスコの祈りは、今生きている喜びを神に感謝することだったという。

1986年11月には、京都梅尾高山寺とアッシジの聖フランチェスコ教会が兄弟教会の縁組を結んだ。聖フランチェスコのエコロジーは、学問や思想、運動としてのエコロジーではなく、自然を愛し、自分を愛する自然な行為で、自分自身の境界を越えて、他の動植物を含むいのちのネットワークまで広がっているとされる。

ラ・ヴェルナでは、サービス車は十分入れる道があるけれども、一般の参拝客や観光客は、遠く離れた駐車場で車を降り、延々とした未舗装の道を歩いてアクセスする。ぶな、もみ、かえでなどが植生する美しい森の中の道である。どこかの国のように、至近の場所までバスや車を引き込むことはしない。小さな町の豊かな生活の本質は、実はこのようなことの総体のなかにあるのだと感じる。



若本 和仁 大阪大学

KAZUHITO WAKAMOTO

アルノ川をティレニア海から遡ると、ピサからフィレンツェとイタリア半島を東に進み、フィレンツェを過ぎたあたりで南下し、アレッソで再び北上する。ワインで有名なキャンティ地方はフィレンツェとシエナ、アレッソに囲まれたアルノ川の西側の地域にあり、ポッピはさらに上流、つまりアルノ川が北上する平野部にある。封建時代の拠点の一つだったそうで、流域の平野部を睥睨する丘上の都市である。

さて、今回の旅行の目玉の一つは、間違いないポッピのワイン祭であった（と思う）。毎年、町中の建物の1階部分を開放して、この地域のワインの展示・試飲会が行われるという。まちづくりに関わるものとしては、このイベントを見逃すわけにはいかない。もちろん、ワインそのものの魅力にも惹かれたわけだが。ポッピのワイン祭は10年程前に始められたプロローコが主催するイベントで、ワインの出展はトスカーナのワイナリーに限っているということである。

1. ホテル

祭りの期間中は、なかなか確保できないそうだが、井口さんの早めの予約の結果、旧市街地唯一のホテルである Casentino に宿泊することができた。

建物は城塞の一部だった（パンフレットより）ようで、丘の頂部にある。ホテルの前には広場をはさんで尖塔のある砦（このあたり一体のランドマーク）が聳えている。ホテルはこれとは対照的に、緑の中庭や小ぶりな建物で構成されており、客室はエントランスより下の階に配置されている。建物が丘と一体となっているので、丘の中腹に宿泊するといった感じである。

部屋の窓を開けるとすぐ下に通りがあり、まちの様子を眺めることができる。今回訪れた他の都市同様に、通りのそこかしこで、会話等して過ごす人たちが多く見られた。また、ちょうど結婚式があったようで、ワイン祭りの準備に忙しいまちの中で新郎新婦が記念撮影をしていた。祭りのためか、深夜になっても、通りでの歓談は続き、歌を楽しむ人たちもいた。部屋の内部はベッドとシャワーがある程度であるが、立地やまちとの関係がおもしろく、ポッピのこの場所でしか味わえない貴重な経験を提供している。

2. ワイン祭り

夕食の前に、まちに出かけた。各建物にはポッピの旗と酒造メーカーの旗が掲げられてお

り、祭りの雰囲気を醸し出している。目抜き通りに面した建物の1階部分の多くが出展スペースとなっていた。そのうちの一つに入つてみると、さらに奥の地階では、ワイン蔵の様子を見せながら、ワインだけでなくチーズやソーセージの販売も行っている。出展のあるエリアはそれほど広い（長いといった方がよいか）わけではないが、道沿いだけでなく地下にもこうしたスペースがこっそり用意されているとわかると、まちに奥深さが加わってくる。

ホテルに戻って夕食を済まし、すっかり暗くなつたまちに再び繰り出す。いつのまにか通りは多くの人であふれており、大いにぎわっている。通りにはテーブルと椅子が置かれ、気軽に座つて祭りを楽しむこともできる。メーカーのスタッフもいつのまにか衣装替えして、自社のワインをアピールしている。こういうところで格好良きめるあたりは、是非とも見習いたいと思う。

ところで、当たり前のことだが、ワイン祭りでは試飲ができる。その方法は、回数試飲券とグラスを購入するというもの。グラスを入れた袋を首からぶら下げて、回数券を持ってお気に入りの場所をまわる。そうして楽しげにまちを散策する姿はとてもいい。

ワインそのものも良いのだろうが、活気を凝縮するようなまちの密度が、楽しさの密度をあげているように思われる。さらに、祭りの舞台がもともとコンパクトな空間である上に、夜の帳がおりると、ますます密度が高まる。ワインや人がクローズアップされ、俄然、魅力が増すように思われる。

建物の一階、地階はその上階の家屋の所有であることが一般的で、普通は倉庫やワイン倉として使つてゐる。空室になった倉庫が増えたところに目をつけて町のプロローコがこれを借りてイベントに活用することを思いついた。

3. ポッピから眺める田園風景

祭りは3日間行われ、我々はその初日にポッピを訪れ、翌日には、帰国やその他の都市への移動のためポッピを離れた。離れる前にポッピから朝のトスカーナを見渡した。丘の上なので、はるか遠くまで見渡せる。緩やかに起伏する美しい田園地帯を眺めながら、日本を思う。田んぼ中心なので様子は異なるが、美しさでは負けていないと。ただ、どちらも人手が入ることが美しさの前提であるという点がミソなのだろうが。

参考文献：イタリア都市の諸相—都市は歴史を語る

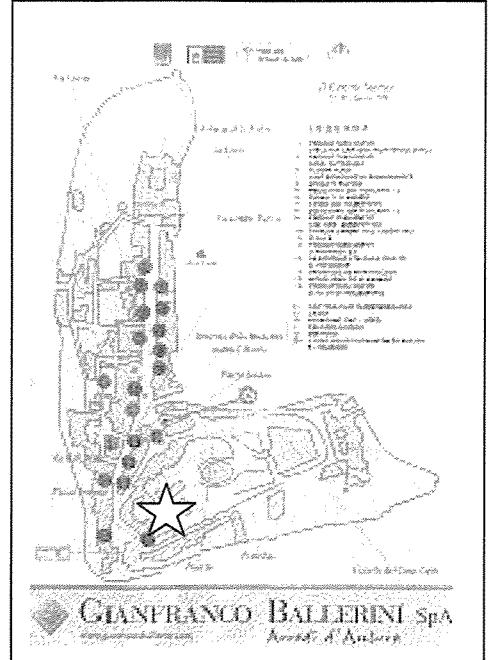
—— 野口昌夫



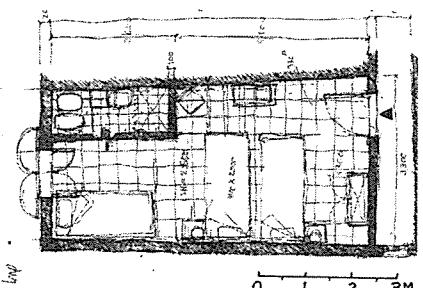
ホテルの窓から見た通りの風景



ワイン祭りの準備が進むまちの様子
ポルティコの奥の部屋にメーカー等の出展がある



ワイン祭り案内図 ☆辺りにホテルがある



ポッピのホテルカセンティーノ実測図
作図 井口勝文

特集 4-7

■チンクエ・テッレ Cinque Terre を守る暮らしと景観

千葉 桂司 (株) URサポート
KEIJI CHIBA

1997年に世界遺産に登録されたチンクエ・テッレの正式名は「ポルトヴェーネ、チンクエ・テッレと小島群」という。チンクエ・テッレ(Cinque Terre)とは、イタリア半島の北西部、東リヴィエラ海岸の一部、リグーリア海岸沿いに繋がった「5つの村」をいう。リアス式の入り組んだ海岸と、崖地にへばりついたカラフルな色彩の集落が織り成す景観は、美しさと共に暮らしの厳しさを感じさせるものであった。夏場の有数なリゾート地・観光地として、訪れた8月末でも、この小さな村々はリゾート客で賑わっていた。

鉄道を自由に乗り降りできるチンクエ・テッレ・カード(1 day ticket)を買い、5つの村々を訪ねる。南からリオマッジョーレ、マナローラ、コルニーリア、ベルナツツア、そして我々が2泊したモンテロッソ。村の間は徒歩でも船

でもアクセスできるが、私たちの訪ねた日は残念ながら波が高くて船が出なかった。いまでこそ海岸沿いに鉄道がとおり、多くの観光客が訪れるようになった村々も、かつては海から船による交通手段しかなく、それゆえに5つの漁村集落は姿を変えずに今日まで存続したのだろう。猫の額のような小さな土地に点在する5つの村々は、そのどこが世界遺産なのかと疑問もわくが、1つの村ではできないことも幾つか集まれば、大きく魅力を増幅できることで納得がいく。

今、この村々を訪ねる多くの人々は、古くて懐かしい村の姿に新しい価値を見出し、熱い太陽を全身に浴びて美しい海と遊び、豊かな時を過ごす。厳しい自然との戦いの中で守ってきた村人たちの暮らしを忘れたかのように。

さて、村の構造はどこもよく似ている。急峻な谷間に海から続くメインの坂道をはさんで、折り重なるように繋がる建物群には、たくさんの店やレストランなどがひしめき、村民と観光客が混ざり合い、高密で濃密な時間と空間が展開する。村の中心的な位置には教会と広場があり、村はずれにはワインかレモンの栽培される段々畑が迫る。村の細い路地は楽しいラビリンスだ。小さな港と街と山が一体となった、まるで盆栽のようなコンパクトな空間だ。昨年訪ねた南イタリアのアマルフィー海岸（同じ年に世界遺産）でも、同じく出入りの激しい海岸線の風景は素晴らしい、イタリアの地中海沿岸は北から南まで魅力に富んでいる。

しかし一方で、この急な坂道や階段は、住民、特にお年寄りの日常生活にとって大変な苦労

だろう。車も使えない。でもそこはきっと、不便を忍ぶ覚悟と諦めのうえで、我が村に誇りを持った人たちだけが暮らしているのではないだろうか、と勝手に推測する。チングエッテレを歩きながら、私は日本の鞆の浦（広島県福山市）の景観破壊のことを思っていた。不便な街であるからこそ残り、残った街だからこそ人々は守らなくてはならない価値を再発見した。鞆の浦もチングエッテレも似てはいないか。そこに暮らす人々が街を守り、守られた街を訪れる我々は、そこから多くの歴史や文化を感じ取り、次代に継承していくかなくてはならないだろう。

鞆の浦景観訴訟は、「景観の公益が開発より優先する」という素晴らしい判決（平成21年10月1日）となった事を、最後に申し添えておきたい。



リオマッジョーレ



マローナの通り



一定区間の鉄道、ミニバス乗り放題の
チングエッテレ・カード

選挙管理委員会 公告

都市環境デザイン会議会員各位

都市環境デザイン会議
選挙管理委員会
委員長 伊藤 登

告示日 2010年4月1日

■都市環境デザイン会議代表幹事ならびに監査役の選挙について

この度、役員の任期満了に伴い、代表幹事、監査役を選挙により選任することになり、役員選出規定第12条により、選挙管理委員会を設け、選挙を行うこととなりました。規定第7条2項に基づき下記のとおり選挙の告示を致します。

以下の点についてご留意の上、多数の立候補を期待致します。

記

1. 今回選出される人数は以下のとおりである。

代表幹事 …… 10名以内
監査役 …… 2名

2. 役員は、あらかじめ会員の選挙によって選出された候補者が、7月（予定）の総会において承認されることにより選任される。

3. 選挙権と被選挙権

第6条 選挙権を有する会員は、選挙告示の日から一ヶ月前（2010年3月1日）までに会員として資格を有したものとする。

2 被選挙権を有する会員は、選挙告示の日から一ヶ月前（2010年3月1日）までに会員として資格を有したものとする。

4. 役員の任期は2年とする。

5. 候補者の形式について

代表幹事、監査役の選挙には2通りの形式がある。

- (1) 自立による立候補
- (2) 選挙権を有する正会員2名の推薦を受けた推薦候補

6. 推薦人は候補者を代表幹事においては2名、監査役については1名まで推薦できる。

7. 候補者の届出は次の様式に従った届出書を用いて行う。用紙は事務局においてあります。

8. 推荐候補の届出には、候補者本人の自署、捺印が必要になるので注意のこと。
9. 届出は、都市環境デザイン会議選挙管理委員会（〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル TEL 03-3812-6664 FAX 03-3812-6828）宛とし、提出期限は2010年4月16日（金）午後6時とする。

10. 投票は、役員選出規定第7条に規定されているとおり、別途送付される投票用紙によつて、無記名、通信制で行うものとする。なお、投票期間は投票用紙送付（4月26日頃）から5月14日（金）（当日消印有効）までの予定である。

■都市環境デザイン会議2010年度役員選挙スケジュール（予定）

代表幹事及び監査役選挙

4月1日（木） 選挙告示
4月16日（金） 候補届出締切（午後6時）
4月26日（月）頃 投票用紙送付
5月14日（金） 投票締切（当日消印有効）
7月17日（土） 定例総会で承認

ブロック幹事選出選挙

4月1日（木） 選出依頼文送付
5月14日（金） 選出期限

■候補届出書の様式

（様式1） 代表幹事立候補・推薦候補届出書			
届出日 年 月 日			
○候補者は下記の各欄を明記してください。			
候補者 氏名	印	生年月日	19年 月 日 満 歳
所属機関			
住所	(郵便番号) 〒 (都 府) 〒		
所 在			
○推薦候補の場合、推薦者が下欄に記入捺印して下さい。			
印			
○推薦理由 (1名)			
(執筆者氏名：) 都市環境デザイン会議選挙管理委員会			

**JUDI 20周年記念事業
特別委員会報告**

各プロック・委員会での進捗状況と検討内容をお伝えいたします。

全国テーマ 「しあわせな風景 × デザイン JAPAN」 (2009.11.18 決定)

各委員会、ブロックでの進捗状況と検討内容 (2010年3月5日現在)

グループ	名称・内容	担当
北海道ブロック	テーマ:「北海道のしあわせ」～北国のしあわせな風景を創る ①20周年記念フォーラムの開催 ②JUDIサロン「しあわせな風景を創る」シリーズの開催(2回) ③北海道の都市環境デザイン20年を振り返り展望する企画の実施(事例パネル展など)	高森 (辻井)
東北ブロック	テーマ:「古の街道がつなぐ未来の風景」 ①街道が繋いた都市の現在(リレー・フォーラム等) ・福島県桑折町(担当:伊藤 登)・宮城県村田町(担当:齊藤浩治)・岩手県江刺市(担当:及川純一)・岩手県盛岡市(担当:渡邊敏男) ②街道がつなぐ未来の風景(統合的イベントの開催)	斎藤
北陸ブロック	テーマ:「北前船交易もたらした"もの"と"こと"」～その現代的意義の検証と再生(仮) ・4県の寄港地各2地域程度の比較調査 ・隣接ブロックとの連携	谷 (塙)
関東ブロック	テーマ:「自然と歴史のまちづくり懐梅からの出発」 ①都市の自然と歴史を無視した問題事例と分析 ②都市の自然と歴史を活かした優良事例と分析 ③今後のまちづくり・都市環境デザインの方向性 その他:一言サロン、キャラバンの記録・文章化	屋代
中部ブロック	テーマ:「地域の多様性が支える新しいコミュニティーデザイン」(仮案) ①「コミュニティーガーデン」をテーマとするセミナー、意見交換会の開催 ②連携事業 “しあわせな風景×デザイン JAPAN”を共通テーマとした JUDI セミナー(6回/年)の開催	谷口
関西ブロック	テーマ:「JUDI関西による都市環境デザインの仕事の展開とその将来」 事業:フォーラムの実施、出版 ①メンバーからの事例紹介 ②都市環境デザインの仕事の総括、ストーリー化 ③フォーラムでの議論、会員執筆による出版	鳴海 堀口 前田
中国ブロック	テーマ:『まちカフェのある風景×コミュニティ・デザイン』 事業:まちの中心部の人だまりを創出するための「コミュニティ空間づくり」となる「まちカフェ」を普及応援する。路上オープンカフェ、リバーサイドカフェなどの経験を生かし、以下の活動を行う。 ①実態調査(概念や仕組みを立案・整理し、ブロック内の主な事例の実態を把握する) ②支援活動 ③中心市街地等での「新規まちカフェ導入の実証実験」	藤本、 亀谷、 (宮迫)
四国ブロック	テーマ:「四国の微笑みの風景」 ①これまでにJUDI四国で訪ねてきた、四国の微笑みの風景のまとめと考察 ②現在、四国をデザインしている人々の微笑みを紹介	重山
九州ブロック	テーマ:「九州らしい地域づくりと都市環境デザイン」 ①記念シンポジウム「九州らしい地域づくりと都市環境デザイン」 ②記念誌「九州らしい地域づくりと都市環境デザイン」の発行 ③仮称「現場で環境デザインを考える」フォーラム In 大分 ④関連事業 2題「研究座談会」「まちづくりセミナー「ゆふいん」」	尾辻
琉球ブロック	テーマ:「琉球の美を探る」 ①関西ブロックとの共同事業 関西ブロックと共同で都市環境デザインセミナーを開催。テーマは要調整 ②関連事業—県民への広報事業 沖縄タイムス住宅新聞への連載(1年) ③関連事業—奄美を対象とする研修事業	木下 伊良部
事業委員会	事業「JUDI “景観賞”」の創設と運営 ①モニターメッセの総括 ②「都市ランキング」の評価指標との整合性 ③「色彩」「SF」「空間」などの部門賞の検討	横川
広報委員会	20周年記念事業の記録事業 ①各ブロックの記念事業記録を各8頁以内とし、10ブロック80頁に記録としてまとめる。 ②それに加えてJUDI活動の系譜を10頁程度にまとめる。	松村
研修委員会	ブロック連携による研修事業 各ブロックで共通したテーマ設定によるセミナー、調査結果などを持ち寄って意見交換する。例:離島の都市環境デザイン(琉球、九州、四国、中国、--)	鳴海
国際委員会	4月以降決定	
美しい都市ランキング委員会	テーマ:「しあわせな風景ランキング(100景)」 ①ランキングとはいうけれど順位づけを目的とはしていない ②WEBなどを活用しながら、会員参加型で「しあわせな風景」を抽出する	高見

事務局より

1. 新会員の紹介

2009年9月～12月の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

12月31日現在の会員数は、410名です。

会員氏名	勤務先(フック)
照井 亮	Schwarz, LLC (関東)
武田 重昭	兵庫県立人と自然の博物館 (関西)
田原 直樹	兵庫県立大学 (関西)
野嶋 慎二	福井大学大学院工学研究科 (北陸)
内藤 郁子	アトリエむべ (関西)
山崎 涼美	卑弥呼蔵 (中国)
紺野 恭司	(株)アーテック (関東)

準会員氏名	勤務先・学校(フック)
中澤 俊	金沢工業大学大学院 (北陸)
増田 岳	金沢工業大学大学院 (北陸)

2. 退会者(2009年9～12月)

石見茂夫、熊本廣通、高倉哲郎、松田芳夫
(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
岸田 文夫	(株)竹中工務店 プロジェクト開発推進本部 〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13 Tel. 06-6263-5926 FAX. 6271-0392
永野 和邦	(株)ラウム計画設計研究所 〒102-0083 千代田区麹町4-3-29 パシフィックシティ麹町7F Tel. 03-3262-7325 FAX. 3262-7389

広報委員会

白濱 力	土田 旭
松村みち子	加茂みどり
菅 孝能	岸田 文夫
中嶋 猛夫	松山 茂
櫻井 淳	横山あおい
吉田 慎悟	島 博司
服部 圭郎	横山 裕
作山 康	